

<目的> 衣生活のあり方は環境の汚染や資源の枯渇と大きく関わる。その中でもタンズが一杯といわれる現状では「衣服の調達」と「廃棄」が環境へ大きな負荷を与えていることを示し、環境保全・省資源に結びつく衣生活教育の必要を示すと思われる。本研究ではとくに、小・中・高等学校の各段階で衣生活教育を受けてきた女子学生について、その環境保全・省資源に関する意識と衣生活行動の現状を調査し、衣生活教育の有効性を検証するとともに、環境保全・省資源と結びつく教育の内容や方法への指針を探ろうとするものである。

<方法> 調査は東京、神戸、熊本に居住する女子大学生1197名を対象として、1992年10月から12月に、質問紙留置法を用いて実施した。調査の主な内容は、環境保全・省資源に対する意識、日常生活における環境保全・省資源行動、衣生活行動である。

<結果> 大学女子学生の環境問題に対する関心は高いが、「経済成長を妨げない程度で環境保全を」とする者も多い。環境にとって好ましい行動をとる者が多く、これらの行動と環境保全・省資源意識との相関も認められた。被服の調達にあたっては、コーディネートを考えるなど、衣服の「装身性」に重点をおいた衣生活行動をとる者が多い。その中には「次々と衣服を購入する」者が20%以上存在し、環境保全・省資源意識の高さが被服の消費をおさえるような行動とは結びついていない現状が明らかになった。これらが、今後の教育でとくに重要な問題であると考えられた。